

◎毎日の河原、その途中に中学校がある。中学校の裏門あたりに自転車を止め、河原の土手まで歩き河川敷に入っている。なぜ自転車をそんな所に止めておくのだと聞かれると、説明しなければならない。自転車はずっと永らく土手の下に止めて土手の中に入って走っていたが、「ちょっと歩く距離を増やそう」と考え家から土手まで何度か歩いて行ったことがあるが、距離がいささか遠い、20分以上かかってしまう。それじゃ途中までと、公園に止めて何日かしたある日、「ああ この自転車 おたくの・・・?」「いつも止まっているので 警察に言おうと 思っていた 持ち主がわかってよかった」とおぬかしになる。

中年のオヤジとババアの二人連れに向かって、「君たち オレンチの近所 市街地に 長らく自転車止めてうろうろしないのかな 駐車場の無い 医院や 散髪屋や・・・」と言ってやろうかと思いつつもニコニコ黙っていた。

そんなわけで、どこの止めようかと探すうちに、中学校の裏の道路、田んぼとの間に空地がある、そこに自転車を止めだしてもう2.3か月になるかな。話はとんだが、河川敷のランニングが終わって、土手を登り坂を下って、中学校の横に来た。2時をまわっていたかな、男子中学生の二人組がオレに近づいてきてニッと笑い、「学級閉鎖」と叫んで嬉しそうにしている。「よかったねえ」と大きな声で返すとより嬉しそうにしている。振り返って、「インフルか・・・」「コロナ・・・」と帰ってきた。学校はいまだにコロナで学級閉鎖をしているようだね。

この中学校の傍を通るようになって気付いたが、最近の中学生の男子は図体が大きくなってきたと思う。高校生と見間違えるような体格の子が幾人かいる。よくこの中学グラウンドでサッカーの試合をしている。公式試合らしく審判が笛を吹いて走り回っているが、高校生の試合と思っていたがどうも中学生である。

先ほどの、学級閉鎖を喜んでいた子も図体がでかかったが、なかみはまだ子供である、可愛いものである。オレは子ども時代、いつも背が高かった、高校に行っても伸び二十歳ぐらいまで伸び続けた。そのころ思ったが、中学でおっさんのように大きかった友人、お姉さんのように大きかった女子も、大きくなるのが止まって、高校に、二十歳になるころには、「え あんな小柄だったかな」と思う友人、知人が何人かいた。

◎先程友人から電話があった。「玄米 どこで 売ってる?」「大きなスーパーマーケットなら 一種類いぐらいいはあるが 米屋なら いっぱい あるはず」「米屋 今どき米屋 ある」「あるある 茨木でも 昔ながらの米屋が 何軒か 残っているよ あるよ」てな話だった。オレはもう何年も玄米飯を食っている、これは美味しい。「メシは 銀シャリ じゃねえと」とおっしゃる方も多いが、玄米飯は美味しい。オレはごはんは、おかず無しでも食える、玄米でも銀シャリでもパクリと喰える、美味しい、である。

◎天気の話。よく降るねえ、だらだらだら毎日ちよつとずつ降り続き、たまにザザザと大降りになる。安威川河川敷も梅雨になって2回ぐらい来られなかった。ちよつとの降りなら、カッパに長靴でやってくる。河川敷きの遊歩道は水はけが悪い、雨が降れば水溜まりができる、そんな所をスニーカーで走るとすぐに靴の中まで水浸しになる。そのてん長靴はいい、オレのようにゆっくり進むなら、スニーカーでなく長靴でも苦にならない。

今日はたまたま半日以上お陽さんが顔を見せている、久しぶりの晴れである。昨日どれだけ降ったのか、その雨降り程度を忘れてしまったが、雨がやんでお陽さんギラギラになって半日経っても、水溜まりの水は引いていない、スニーカーでじゃぶじゃぶ入っていくわけにはいかない。ゆっくり歩いて、ちよつと横にそれて、草の上を歩いて、こわごわ、水を避けてエンヤコラ走っている。

◎安威川の流は濁った水をどんどん運んでくるが、ダムができて以降、上流の雨が感じられない。おそらくダムは満杯じゃないのかな、次の大雨のためにどんどん水を流しているのかな。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎東に向かうイハレビコ

◎カムヤマトイハレビコは、同じ母のタマヨリビメから生まれた兄イツセの二人は、日向（ひむか）の高千穂の宮を発って東に向かった

◎天孫降臨で天上界から地上に降りてきたのは、アマテラスの孫である、アマツヒコヒコホノニギ<ニギ>。

◎ニギが麗しいおとめご、コノハナノサクヤビメに出会い、妻にした。

◎コノハナノサクヤビメは、ニギに身ごもったと言い、燃え盛る産屋の中で、兄：ホデリ<ウミサチビコ>と弟：ホヲリ<ヤマサチビコ>を生んだ。のちに弟が兄を支配するようになる。同じ腹から出た兄弟なのに、話では、齒向かう勢力として制覇され家来にされていく。

◎ホヲリは失った針を探すため、海の中、ワタツミの宮に来て、トヨタマビメと出会い三年を過ごした後、地上階に舞い戻り兄と戦う。

◎ホヲリのもとに、海の中からトヨタマビメが来て、子が産まれるという。ホヲリは子を産む姿を見るなどと言われ、見てしまうと姫の姿は八尋のサメであった。トヨタマビメは姿を見られたのを恥じ、海の中に帰った。

◎トヨタマビメは、自分の代わりとして御子を育てるため、妹のタマヨリビメをホヲリのもとに送ってよこした。

◎ヒコホホデミ：ホヲリ：やまさちびこ：580歳まで生き、御陵は高千穂にある。

◎その子、アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアヘズ。アヘズは叔母でもあるタマヨリビメを妻として、イツセ、イナヒ、ミケヌ、ワカミケヌの四柱を生んだ。姪と結ばれる話は多いが、叔母と結ばれる話は少ない。

◎四番目のワカミケヌ、またの名、カムヤマトイハレビコ：初代神武天皇、このイハレビコの話に移っていく。

◎先生：神武東征：なにゆえに東に向かうのか。「ひんがし」「ひむかし：ひにむかうところ」と語源のように、太陽の子にとって東は聖地なのか・・・。

◎先生：邪馬台国：やまと：と読む、やまたいこくではない。邪馬台国の時代は3世紀前半で東征はもっと後。騎馬民族が朝鮮半島を経由して東征したという説を唱える人もいる。

◎神倭伊波礼毘古命：カムイヤマトイハレビコは、初代の、神武天皇のことである。

◎カムイヤマトイハレビコは、兄のハツセに、「いかなる地（くに）に住まいすれば 平かに 天（あめ）の下のみつりごとを 治めることができますか ここから出でて ひんがしに いきませんか」

◎日向の高千穂→筑紫→豊の国の宇沙→筑紫の岡田の宮→安芸の国の多祁理：たけり→吉備の高島の宮→速吸の門：はやすいのと：明石→大阪湾

◎銅剣と銅鐸：弥生時代に朝鮮半島から九州北部に銅や鉄が伝えられた。以後近畿地方にも広がりを見せる。

前40～前30に北部九州で銅剣銅矛朝鮮半島から伝来し、まもなく国産化も始まった。

銅鐸はほとんどが近畿地方で発見されている。

わが茨木市から出土した銅鐸の鋳型は石製であった。使い終わったのちは砕いて刃物を研ぐと石として使用されたが、丸々の形で出土したものもある。

◎3世紀の九州。ネットによる九州賛歌。九州には卑弥呼を加え、女王：女酋が10人以上いた。小国分立、呪術支配のよる閉塞感があった。中国大陸も荒れ、日本に力を及ぼせない状態。朝鮮半島は、高句麗、百濟、新羅が起こった。日本では九州勢力が新天地を求めて、近畿の銅鐸文化を滅ぼす東征に出た。記紀神話は300年前後に実行された。アマテラスは卑弥呼のことであり、天皇家の出自は九州である。大和朝廷の中核は大伴、中臣、物部の各氏で九州の豪族であった。大和の豪族は、三輪、磯城、宇陀の三氏らである。

◎9:45 登山口から登り始めた、涼しい、大阪の蒸し暑さが嘘のようだ。ここは二度目、階段下に登山届を出す箱がありそれに書き込んだ。横にはトイレがある、どなたかが掃除をしてくれている。昨夜、山の天気予報を見たが、気温は大阪の35度に比べ20度しかない、ただ登山にはやや不向きとなっていたが、多少風が吹いているだけで涼しいぐらい、丁度いい。斜度のゆるい尾根道、大きくポコリンの尾根道、木の根っこがグニュグニュ地面をおおっている。蛇様だねえと思いながら、先日発見された蛇行剣の話。

◎奈良の富雄丸山遺跡から大形の蛇行剣が出土した。考古学の世界では、「謎の四世紀」というらしく、この時代がわかっていないそうだ。倭の五王がいて、卑弥呼がいたのは三世紀。弥生時代は3000年前～3C半ば、古墳時代は3C半ば～6Cと大雑把に聞いたとして、天孫降臨の時期は？中百舌鳥の大仙古墳の時期は？と古事記を読みながらいつの時代のことかなとも考える。ま、神話のことだから気にしなくてもいいかとも思ってしまう。この遺跡はまさにその謎の四世紀のモノらしい。

220センチ超えの蛇行剣。蛇行とはいえ、見た目2～3センチぐらいの蛇行かな。歴史的発見らしい。剣は突くもの、刀は切るもので、この蛇行剣は両方の性質をもった祭器らしい。話は脱線。

◎朝6時出発、6時半大日の予定だった。5:40に難波さんが自転車であつてくれたので、「それじゃ 自転車おいていただき、荷を載せていただき、出発しましょう」と早めに走り出した。東高校あたりで盛んにスマホが鳴る、「なにかいな 運転中は 出られないよ」と思いつつ車を止めた。ひろみさんから、「家を出ようとしたらぎっくり腰 伝い歩きしかできない」というラインが入っている。ここまで来たら大日の横を通過して、近畿道、南阪奈道を行きましようと思つて車を進めた。

◎ソーメンの話：前日に、「ゆっくり山なので ソーメンでもしましょうか」という話が進み、オレがソーメンとコンロ一色、ひろみさんが“ぶっかけだし：これは楽しみだったが味わえなかった”と薬味、そう分担が決まっていた。「高速に乗るまでに ソーメン汁を 手に入れよう、薬味は 我慢する としても」と2件コンビニに寄ったがない。「ひろみさん宅まで 取りに行けば よかったか 遠回りになるか」思案の末高速に乗った。奈良の五條ICで降り168号線を和歌山方面走らせた。昨日ソーメン汁を買ってザックにいれていたが、「ぶっかけだし 用意したよ」と聞き、持っていくと失礼かなとザックから出した。まだ朝の7時過ぎで食料品店は無く、ローソンは何軒もあるが出汁系は売っていない、やっとファミリーマートを発見、これはソバ出汁、こっちがソーメン出汁なんて言いながらお目当てをゲットして、難波さんが持ってくれた。

◎同道の難波さんが、「おおお ここは素晴らしい きれい 前回の 大台ヶ原もよかったけど ここも素晴らしい」と感嘆の声を上げておられる。そう言われあらためて見てたしかに綺麗、まったりしたポコリンが続く、膝ぐらいの笹が草原を思わせる、樹々がまばらで見通しもいい、白い雲が半分ぐらいの青い空、いいねえ、きれいねえ。前回来た時はさほど思わなかったが、ここもいい感じの尾根道だ。

◎水場に近づいたが、水がポチャリぽとりとソーメンを食べるには勢いがなさすぎる。水が豊富でないのはわかっていたので、1.5リットルを担いできた。登山口から30分ほど登った時に、「あ 忘れた」と声がした。「なにを」「ソーメン汁」「え・・・」啞然としたがもう引き返せない、「あちゃ～」である。おにぎりを二つ買っていたのでよかったが、全山行程がシャリばて気味である、飯がないのは辛い。

◎釈迦ヶ岳山頂にやって来た。この観音さんは我が友人の水島さんの爺様が寄贈したとか、帰ったらまた写真を送らねばと思つて記念撮影をした。

◎白黒の太い幹、ブナのような模様の幹だけれど葉はカエデ調、その緑も笹の緑もいい、深仙の小屋がチラリ見える、釈迦ヶ岳は1800Mもある、深仙は1500M、水場があり池と水溜まりが2か所ぐらい、ここはどこでもテントが張れるなと思ひながら山を楽しんだ。簡単にさっと上り下りと思っていたが、それなりにエンヤコラおおいに楽しんだ。シャリばて気味も、袋に入ったかりんとうを、柿の種を、そんなこんなをポリポリやりながら3時頃に車に帰ってきた。まずはスマホの山地図を保存、6時過ぎるかなと家族に連絡、靴を替え出発した。はちみつが買えたらいいねえ、なんて話しながら・・・。

◎今年の梅雨はだらだら長い、雨がよく降る、やだねえ、と思っていた。国道 168 号線、奈良：五條から和歌山に抜ける道だ、昔から何度か通ったことがあるが、これがあの道かと驚くほどに整備され豪華になっている部分もあれば、昔ながらの車が行き交うのも難しいような細いところもある。谷瀬のつり橋のちょっと手前を右に入り、すぐに峠の登山口だと思っていたが、グネグネ道を 30 分以上登って行った。間違えてないだろうねと疑心暗鬼、なんとか目的の場所に到着した。大きな土砂崩れはなかったが石がコロコロ落ちている、板状の堆積岩が落下して砕けたかけらが散乱している。6 時頃には家に帰りつくかなという帰り道、このするどく尖ったこぶし大のかけらで痛い目にあった。

◎車のマニュアル本を家に置いていた、帰り道の坂で、エンジンプレーキをかけてもっとゆっくり走るべきだった、おっさんが自分の車のタイヤ交換ぐらいできなくてどうする、反省しきりだ。

◎走りながら、パシリと石を跳ね飛ばした、「あれれ まさか」と思いながら走っていたが音がする、なるべく平らな広い場所を探して車を止め、降りて見ると左前輪がパンクしている。車のトリセツ本を乗せていない、家にある、困ったなと思った。JAF に電話をとボックスの中を探し書いてある番号に電話を入れてみたが通じない、ここは山の中、電波が通じないのである。タイヤそれぞれに石をかまし工具を出してみた。車の底にあるスペアタイヤを確認し、ジャッキを置く位置を確認したが、ジャッキが固くて少ししか上がらない。しかもスペアタイヤのはずし方がわからない。

◎3 人連れの方が止まってくれ、「おひとり 電話の通じるところまで 乗りませんか」と言ってくれ、難波さんに乗ってもらった。オレは 3 時間以上待った。昔、北岳の途中で車が動かなくなり、半日待った思い出がある、山の中では修理の車はすぐには来てくれない。難波さん、下の国道 168 号線まで乗せてもらい JAF に電話をして 2 時間ほど道沿いで待ってくれたらしい。

◎JAF のあんちゃんが、取り外したタイヤを転がし、「どこだ どこだ あ これだ これはもう 破棄だ 修繕はできない」という。タイヤの着地面が 3 センチぐらい裂けている。オレはこの車を買った時点で、一年先の車検時にタイヤ 4 本交換しないといけなくと決めていた。ちょっとだけ早いけど 4 本全部換えようとしたが、時間がない、1 週間先には信州方面に行く予定がある。ところで、スペアタイヤ調べると：応急用タイヤは距離が 100 キロまで、時速は 80 キロまでとなっている。家まで高速道路を使って距離 100 キロ以上を、時速も 100 キロ以上出して帰り着いた。

◎いくつかのタイヤ屋を検索した。まず不思議なことがわかった、メーカーは火曜水曜が定休日で連絡がつかないこと、最近の風潮なんだね、昭和時代とは様変わりである。サイトには“サマータイヤ”という文字が載っている、これは何？オレはスタッドレス以外はタイヤだと思っていたが・・・、この言葉には惑わされてしまったが、「サマータイヤとは 普通のタイヤのこと」とタイヤ屋のあんちゃんから聞き、これも昭和時代には知らなかったことだと反省。

◎いくつかの店に電話、タイヤサイズ、車種などを言い、話を聞いた。近くで知っていると思う店はメーカーにあわせて火曜水曜が休みの店が多い。10 日先になるというところもあった。R・S（アールズ）という店が一津屋にあり、いつも運動に出かけるあたり、電話に出たあんちゃん、「毎度 タイヤですか・・・」とも言わないのでオレが買いたい旨知らせた。「あ そうですか それでは」と俄然丁寧になり、ピレリを勧め、2 万ほど高くなればブリジストン、という。「こだわりがなければ ピレリがいい」彼の口調に、「そんじゃ それ」と即答。「お金を前金で欲しい 62040 円」「OK」一津屋ならいつもの運動コース現金を持っていくことにした。安威川を中央環状線まで行き、江口橋に向かう 16 号線をちょっと行ったところ、「ここかな」「ちがうかな」と路地を探し R S の文字を見つけた。翌日タイヤが来たという連絡を受け車を走らせた。1 時間ほどで工事は完了。オレの性格、なにか事故があるとそれが解決するまでなにも手につかない、イライラしながら 3 日や 10 日は過ごせない。8 日にパンク、9 日に注文、10 日解決、そのスピード感がいい。タイヤ屋のあんちゃんも、「このタイヤ いい感じですよ 今までのモノより ワンランク上のグレード」という、いいじゃないの。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さあ、ここからは初代天皇となるカムイヤマトイハレビコが、九州から奈良の橿原に向かって進む話、八咫鳥も出てくるよ。

◎先生：古事記は天皇家の歴史を語っている。天皇や朝廷に従順なものだけが正しいと語られる。そらそうだね、自分に逆らったもの、自分より優位なもの、自分を虐めた輩、そんなモノたちを良くは言わない、そらそうだ。

◎“浪速の渡”“白肩の津”“盾津（日下の蓼津）”“血沼（ちぬ：和泉地域）大阪湾のどこからしいが場所はわからないらしい。2000年近い昔、生駒の麓が海岸であったとか、今の大阪平野は全部海だったとか・・・。

◎イハレビコは兄イツセと二人で浪速の辺りにやって来た。登美に住むナガスネビコ（トミビコ：ともいい奈良西部の豪族、東征に最も激しく抵抗した一族）が戦の備えをして待ち迎え挑んできた。兄イツセが矢を受け、「賤しい奴（やっこ）に手傷を負わされて 死んでしまうのか」と言うて、雄叫びして死んでしもうた。

◎東征ルート：近畿に入ると俄然、何処だと詳しく知りたくなくて地図を見ている。最終地点が奈良の橿原なので、陸路で一番近いのは三重県の伊勢に近いあたりだそうだがわかっていない。まずは和歌山市あたりに上陸し、それから紀伊半島の海上をぐるり反時計回りに、最南端の串本から、新宮、熊野、尾鷲と進み伊勢に近い何処かに上陸したということのようだ。

◎さて、兄に死なれたカムヤマトイハレビコは、そこからも巡り行き、熊野の村に到りついた時に大きな熊がふと現れ出たかと思うと、たちまち姿を消してしまった。すると、カムヤマトイハレビコはにわかに病に襲われ、つれておった軍人どもも、みな倒れ臥してしまった。

すると、この時、熊野のタカクラジが、ひと振り太刀を持ち、天つ神の御子が病に臥せっているところにやってきて、その太刀を奉った（たてまつった）ところが、天つ神の御子はすぐに目覚め（たちまち元気になって）「長い間 寝てしまったことよ」といった。

そして、その太刀を受け取ったかと思うと、あの熊野の山の荒ぶる神は、手を下すまでもなく、皆おのずと切り倒されてしまった。そして、倒れ臥せておった軍人どもも、ことごとく目覚めた。

◎この太刀の名は“サジフツ”“ミカフツ”“フツノミマタ”三つも名前が在って石上神宮にあるそうだ。石上神宮は物部氏の斎を祀る神社。石上神宮は朝廷の武器庫としての性格を持ち、国宝七支刀もある。

◎七支刀：しちしとう：ななつさやのたち：百済：ペクチェで製造された。表裏に 60 ほどの金象眼の文字があり、おおよそ解明されている。「百済王が臣下たる倭国に渡した」と解釈される。369 年製造。物部氏は 6 世紀には蘇我氏に敗れ消えていった。

◎カムヤマトイハレビコと軍人（いくさびと）たちの一行だけかと思ったが、天からいろいろな援助や指令が見える。突然現れた太刀によって、倒れ臥していた皆が生き返り、「よく寝たな」ということになった。天つ神の御子が太刀を得た故を、タカクラジに問うた。

◎タカクラジは答えて、次のごとくに見た夢の話をした。シャーマンのタカクラジが、夢のお告げで太刀を見つけた。

◎私はつぎのような夢を見ました、そして無事に太刀を手に入れ、差し上げたのでございます。

アマテラスの大神とタカギの神との二柱のお言葉で、タケミカヅチ（オオクニヌシを服属させた武神）を呼び出して仰せになりました。

「葦原の中つ国はひどく騒がしいありさまである わが御子たちも苦しんでいるらしい その葦原の中つ国というのは 先にしっかりと 汝を言い向け平らげた国である ゆえに なんじタケミカヅチよ 降り行け」

すると、タケミカヅチは答えて、

「我が 降らなくても ただ この国を平らげた太刀さえあれば 事足りるので、この太刀を降ろし与えてください そして この太刀を降ろすさまは タカクラジの倉の屋根に穴を開け そこから落とし入れるのがよろしいでしょう」

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎天からの声、アマテラスの横に居るタカギから。

すると、そこにまた、タカギの大神の言葉が聞こえてきた、

「天つ神の御子よ ここから奥の方に入ってはいけませんぞ 荒ぶる神がひしめいているからだ 今すぐに天よりヤタガラスを遣わそう かならずや そのヤタガラスが 導いてくれるであろう 御子は ヤタガラスの発ち行くあとをたどって行きなされ」といった。

◎八咫鳥：三本足の大きなカラス。カラスは不吉な鳥とされているが、古くは神の使いと考えられていた。カラスは頭がいい。人 9、イルカ 5、霊長類 3、鯨 2、カラス 1.5、犬、猫と続くとは、ほんまかな。昔話ではカラスは人と共存したり、可愛がられたり、語られたり、現在と様子が違う。山にいるホシガラスは何度か見た、カラスと同じぐらいの大きさ、黒い身体にパンダのような白い斑点がある、こやつは山の中で可愛いよ。よく見かけるカラス、“はしぶと”“はしぼそ”の二種があるらしいが、これも確実に区別がつかない。

◎紀伊半島の端から奈良橿原まで進んで行く。

◎「お前は 何者だ 名は」「〇〇と申します 以後お仕え申します」このパターン、TV ドラマでもよくあったシーンである。「そちは 何者じゃ」「ははは 〇〇と申します 以後 お知りおきを・・・」

「名前を問われ応えるというパターンは服属するということを語っている。この道中の間に幾人かの人が現れ服従していく。

◎吉野の河上。河で魚を獲る人。「なんじは誰だ」「ニヘモツノコと申します」阿陀の鵜飼の祖である。

◎山の中。「なんじは誰だ」「イヒカと申します」吉野の首（おびと）らの祖。

◎また山の中。「なんじは誰だ」「イハオシワクノコと申します」吉野の国巢（国栖くず、土着民への蔑称）

土蜘蛛：倭王朝に服従しない土着の豪族を称して言う。土窟の穴居していたものも。

◎山を踏み超えて宇陀に出た、そこで事件が起こる。

◎エウカシとオトウカシの兄弟がいた。まずヤタガラスウを遣わし、二人に問うた。

「今 天つ神の御子がお出ましになった なんじどもは お仕えいたすか」

兄エウシカは、鳴り鏑を構え、遣いのヤタガラスに射掛け追い返した。そして、エウシカは待ち構えて、天つ神の御子を撃とうと軍を集めたが集まらず、お仕えしますと偽り大きな殿を作って、殿の中に墮としの仕掛けを作り待っておった。ところが弟のオトウカシが先回りして、兄の悪だくみを明かした。エウシカは反対にその穴に墮とされ潰され死んでしまった。お仕えしたオトウシカはもてなしの品々を差し出し、ことごとく軍人に賜わった。この時の宴で、天つ神の御子は歌をうたった。オトウシカは宇陀の水取らの祖である。

うだの たかきに	宇陀にある 高い山城で
しぎなわ張る	鳴を獲る罟網を張ったよ
わが待つや しぎはさやらず	ところがどうだ わしらが待つ 鳴はかからず
いすくはし くぢらさやる	磯も麗しい 大物の鯨が引っかかったぜ
こなみが なこはさば	しわくちゃ妻が おかずを欲しいと乞うたなら
たちそばの みのなけくを	タチソバの実のごと 身の無いスジ肉を
こきしひいね	こんちくしょうめ
うはなりが なこはさば	後にもらった若妻が おかずを欲しいと乞うたなら
いちさかき みのおほけくを	イチサカキの実のごと 身の多い美味しい肉を
こきだひいね	こんちくしょうめ
ええ しやごしや	ええい へなちょこども
ああ しやごしや	ああよ 腰抜けどもよ

- ◎先日のソーメンのリベンジ、「もう一回 釈迦ヶ岳へ」ということで歩きは決めた。大阪からこの登山口まで3時間ちょっと時間がかかる。距離は130キロしかないが、京奈和自動車道、五條より先は高速道路がなく、そのぶん時間がかかる。もう40年近く前のことだが、東吉野に家がある榊井君が、「家まで1時間半」と言っていたが、何度挑戦してもそんなに早くいけない。多分、彼は夜の遅い時間に茨木を出て、近畿道、西名阪道、針ICで降り東吉野村役場付近の実家までというコースだと思う。余談だが、今年もソーメンを注文した。9キロ送料込みで8100円と大負けに分けてくれる。
- ◎もう石ころは踏まないぞとゆっくり走った。車を止めて4時間もいたのに、何処だったかなとわからないものである。地面に散らばった尖った石も少なく、帰りも順調にエンジンプレーキを効かせて車を走らせた。
- ◎これを書いている今、アトリエの温度は37度、この温度になると体力気力が衰え、思考が鈍り、ボツとした状態になる。早く身体が慣れてくることを待つばかりである。
- ◎登山口の駐車場で車を降りた時点で、標高1500M、とはいえ太陽のキラキラがアスファルト舗装に照り帰り、「暑いねえ」である。靴を履き替え、ザックにソーメン用の水を5リットル入れ歩き始める。森林地帯に入るとやや涼しい風が吹いてくる、「さすが 涼しいねえ 気持ちいいねえ」である。
- ◎異常な暑さ、危険な暑さ、予報士が淡々と言うが、35度を超えると暑い。夜も25度を超えると暑い。我がアトリエは冬涼しく夏暖かい、と冗談で言っているが部屋が広いぶん、天上が高いぶん、温度の制御は難しい、クーラーをかけてもおいそれとは冷えないので、教室の無い時はあまりかけていない。ある方が、「寒いぐらいにクーラーをかけ 布団をかぶって寝ると快適である」「いやあ うちか かるーく扇風機で快適に寝られるよ」皆さん快適を自慢されるが、10年20年、夏の暑さが高くなってきていると実感する。
- ◎膝ぐらいの高さの笹の間に登山道が見える。このあたりは倒木が多い、でっかい樹が倒れ年数がたって白骨化している。横倒しの根っこの直径が3メートルを超えている。よそでは樹が倒れると腐り、苔やキノコ類が繁殖し、少しづつ崩壊していくが、ここのはなぜか白骨化である。今日もまた鹿を見た、逃げないのかなと思ってオレが動く慌てて飛びあがり逃げて行った。
- ◎黒い服は、蜂の攻撃を受けやすいのかと問われ、聞いたことがあると調べてみた。どうも本当の様で、黒い色の服装は攻撃されやすいようだ。理由として考えられるのは、蜂の天敵が黒い熊、蜂を食べる東洋人の黒髪、動物の急所が黒い色をしている、などらしいが決定打ではないようだ。
- ◎偽説：もっともらしい話。筆頭格は、義経ジンギスカン説である。源平合戦のヒーローである源義経が蝦夷地（北海道）に逃れ、樺太経由で大陸に渡り、現地のモンゴル人を束ねジンギスカン（ジンギス・ハーン）になったという話、これも聞いたことがあるねえ。源義経→ゲン・ギ・ケイ→チン・ギス・・・。
- 竹内巨磨：宗教家：神武天皇以前に、古代文字があり、天皇が全世界を支配していた。釈迦・モーゼ・キリストが日本を訪れ、天皇の教化を受けていた。ゴルゴダで処刑されたのはキリストの弟で、キリストは日本で没した。絶対に錆びない“ヒヒイロカネ”という金属があり、麻原彰晃もそれを探しに行ったという逸話もある。
- 日（日本）ユ（ユダヤ）同祖論：これも偽説のひとつである。日本人は2700年前アッシリア人に追放されたイスラエル人の一族である。明治期来日したスコットランド人が日本と古代ユダヤの相似性の調査を進め、日ユ同祖論を提唱、体系化した。ウキペディアでは偽説として長々と解説している。
- ◎さあ ソーメンタイム、日陰がいいということで尾根道から少し斜面を下ったところで陣取った。バーナーに火を点けボールでも入りそうな大きな鍋に水をドボドボ、「お 湧いてきたよ」ひとり二束ずつの穴束をパラパラと入れる。「ちょっと 水が 少ないか 箸で 時々 かき混ぜて」「このソーメンは 固い 2分半だ」榊井君のソーメンは他所に比べ固いそうだが、最近はこの手しか食っていないので皆さんのいうことを参考にした。何度もざるに上げては洗い、最後に、湧水を組んできていただいたので、その冷たい水をくぐらせるといい塩梅に冷たいソーメンができた。すぐき、錦糸卵、ネギ、みょうが、生姜、をかけて美味しい、それにシュウマイ、焼き鳥まであった。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎大きな岩穴に着いた時、尾の生えた土雲（土蜘蛛）が待ち構えて唸っておった。そのヤソタケルどもを みなたたき殺した。その時の天つ御子の歌。

おさかの おほむろやに	忍坂（おさか：桜井）にある	大きな岩穴に
ひとさには きいりをり	人々は多く	集まりおり
ひとさには いりをりとも	人々は多く	入りおるとも
みつみつし くめの子が	強い力の	久米の子たちが
くぶつつい いしつつい持ち	こぶ付き槌や	石鎚を手に
うちてしやまむ	打倒してしまおうぞ	
みつみつし くめの子らが	強い力の	久米の子たちが
くぶつつい いしつつい持ち	こぶ付き槌や	石鎚を手に
いもうたばよろし	今こそ撃つに良いおり	

◎さて、その後のこと、トミビコを撃とうとして、天つ神の御子が歌った。

みつみつし くめの子らが	力にあふれる	久米の子たちが
あはふには かみらひとと	あわ畑に生えた	ニラがひと本
そねがもと そねめつなきて	その根元から	その根も芽も繋いで根こそぎに
うちてしやまん	みな撃ってこそ止めようぞ	

みつみつし くめの子らが	力にあふれる	久米の子たちが
かきもとに うえしはじかみ	垣根のわきに	植えたハジカミ
くちひひく われは忘れじ	口がひりひり	忘れはしないぞ
うちてしやまん	みな撃ってこそ止めようぞ	

かむかぜの いせの海の	神の風吹く	伊勢ノ海
おひしに はひもとほろふ	大きな岩に	へばりつき這いまわり
しただみの いはひもとほり	巻貝のごと	兜を付けて這いまわり
うちてしやまん	撃ち果たしこそ止めようぞ	

◎エシキと オトシキを 打ち倒した時は、軍人たちが疲れ果てた、それで、天つ神の御子が歌った。

たたなめて いなさの山の	盾を並べ弓を射る	いなさの山の
このまよも いゆきまもらひ	樹々の間を	行き巡り行き守り
たたかへば われはやいぬ	戦い続けて	我は腹ペコ
島つとり うかひがとも	島の鳥の	鵜飼いの友よ
いますけにこね	今すぐ助けに来てくれ	

◎さて、こうして、荒ぶる神どもを言い向け平らげ和らげ、従わない人々を追ひ払って、カムヤマトイハレビコは、畝傍の白禰原（かしはら）の宮に座して天の下を治めたもうた。

- ◎将棋頭山（棋ではない：長野県）は、木曾山脈：中央アルプスに属し、木曾駒ヶ岳の北側にある。伊那谷から見上げると、将棋の駒の頭に見えるらしい。
- ◎山を下りて、帰る前に地元の農産物を売る店に寄り、ブルーベリーをゲットした。その折、軽トラックに乗った地元の人3人に、うしろを振り返って、「将棋頭山 どれか ご存知？」と聞いたが、「???」首をかしげておられた。山のとっぺんからは伊那の街が見下ろせたのだが・・・。
- ◎黒丸Pで小休止。トイレを出ると庇の下にツバメの巣が二つ、泥製の巣の中にはそれぞれ3羽ずつの子ツバメが嘴を開けている。子ツバメといっても親より少し小さいぐらい、親ツバメが来て、パットどれかの口に餌を突っ込み、サッと飛び去って行く。朝8時に新大阪駅で、真鍋・町井の二人を乗せ豊中ICを目指したが、阪神高速の豊中ICと間違えそのまま中央環状線から吹田ICの名神高速に乗った、失敗した。
- ◎恵那SAで昼食と思ったが混んでいる、コンビニでかる〜い弁当を買って車の中で喰った。信州が近づいても異常な暑さは続いている。「信州は涼しいのでは・・・？」この暑さは標高1000メートルの“小黑川キャンプ場”でも同じであった。
- ◎テント場は“桂小場登山口”車で15分手前にある。3時前に着き2泊、4000円の場所代を払いテントを3人分張った。「明日は3時起き4時出発」「なので早く寝ましょう」3時なんていう、こんな時間はかつてなかったが、最近のオレ、ジジイになって5時や6時には平気で起きられる、3時も無謀な時間じゃない。去年、上高地の横尾でテント泊をして、5時に登山口、夕方5時にテント場まで帰ってきた。
- ◎あまり冷えていないビールを飲み、冷凍の餃子、チヂミ、焼きそばを作っていた。腹いっぱいになりほろ酔いでテントに潜り込んですぐに寝てしまった。
- ◎3時半ごろに起き湯を沸かしコーヒーを、パンを喰って、行動の水、食料をザックに詰め車を走らせた。まだ真っ暗の中10分ほど走ると登山口がある。昨夜、食事中に上がっていった車があったが、3台ぐらいの車が止まっている。登山靴に履き替えヘッドランプを点けて歩き始めた。多少明るくなってきた。途中で朝焼けが始め、まもなく陽の出かなと歩いた。
- ◎「やっぱり彼らだ 平出・中島 の二人だ 死亡が確認だって・・・」オレはこの中島君が好きで、よく彼のドキュメントを見ていた。関西弁で朴訥で、先輩である平出から、上目線で言葉をかけられていた。中島がネパールあたりで、「ドローンを飛ばしてみよう」なんて言いながらの画像、さすが世界の屋根はすごい、と気に入っていた。これからどんどんあんな画像を撮ってもらいたかった。つくづく残念である。
- ◎空はだいぶ明るくなってきたが樹林帯の中はまだ暗くヘッドランプが離せない。土の登山道を登っていく、斜度はきつくないが高度を稼いでいく。左右には背丈ぐらいの笹が生えている。
- ◎この樹はなんの樹、カラマツである。北海道、岩手、長野で電信柱や鉄道枕木用に積極的に植林されたいらしい。秋になるとこの紅葉が素晴らしい、全山赤っぽい黄金色に輝き好きな色調である。
- ◎黒褐色の鳥、スズメぐらいの大きさ、目の前をパッと5メートルほど飛んで行って小枝に止まる、オレが進んで行くとまた、パッと5メートルほど飛んで行って小枝に止まる、そんなことを5.6回繰り返し最後は横の方に飛び去った。サントリー鳥図鑑で調べてみたが、コレと確定できない。
- ◎6時頃に分岐道があり、横山と書いてある。地図を調べると、1700Mから1900Mあたりに3本の分岐がある。横山は我々が登った登山口のまだ下の方の集落からの道のような。もう2本は北に向かって、権兵衛峠つながっている。地図では権兵衛街道と出ているが、機会があれば行ってみたいところである。昔、警察官に案内されて、「権兵衛峠はこっちです 気を付けて」と車で走ったことがあった。鄙びた山道を走った覚えがあるが、あれがそうだったのかもしれない。
- ◎6:30 標高は2000Mぐらい、馬返しの標識がある。長野県は馬文化の地、ここまで何を運んできたのか、ここからは馬も登れぬ急峻になるということか、中世のにおいを感じ取っている。

- ◎風が吹いてきた、空を見上げると青い空にうっすら雲がかかっているという晴れの天気である。長袖のシャツを一枚で丁度いい、爽やかにヨイコラショ。
- ◎昨夜は、冷凍食品を持ってきた。フライパン一丁で、まずは餃子、つづいてチヂミ、最後の仕上げはソバメシである。ソバメシとは、焼き飯の中に短く切ったそばが入っているという代物、ビールも2本飲んで腹いっぱいになり、ご機嫌であった。
- ◎7 時前に大樽避難小屋に到着。最初の予定では、ここで泊まるということだったが、水場が枯れているので、急遽、小黑川キャンプ場をおさえてくれた。終わって顧みれば、このキャンプ場が正解であった。荷を担いで3時間足らず歩くのは大変だったこと、キャンプ場が意外と快適だったこと、という理由である。
- ◎信大コースという分岐があった。内藤君はここを歩いたかな、信州大学山岳部が開いた道だろうが、迷いやすい、橋が壊れているという理由で、ここを通るのは控えてくださいと書いてある。
- ◎信大コース分岐：2100M から乗越：2500M までは、胸突き八丁と書いてあるが、普通に斜度のきつい登山道であった。
- ◎8 時前に六合目という標識を通過。この道はかつて木曾駒に登る登山道だったと想像する。調べると、想像通りクラシックルートのひとつ。将基頭山から木曾駒山頂まで往復3時間ぐらいかかる。今はケーブルがあるのでたくさんの方々が気軽に木曾駒てっぺんに登ってこられる。
- ◎8 時：津島神社通過。祠があるようなないような、斜度のきつい道、は～は～ぜ～ぜ～である。
- ◎乗越にやって来た、こちらが西駒山荘から木曾駒ヶ岳方面、こちらが行者岩、茶臼山方面。将基頭山付近を地図では三角形に道が付いている。終わってみると、将基頭山と今立っている分岐とのつながりは三角形の一边、冬道がある。踏み跡もあり簡単に歩けた。目の前に雄大な山、目的の将基頭山がでんとある、きれい、美しい、アルプスの尾根道の素晴らしさが目に飛び込んでくる、「がはは うれしいねえ」 この分岐の辺りでいささか疲れてきた、夏バテがきいてきている、ついていくのがやっとである、は～は～ぜ～ぜ～。
- ◎西駒山荘にやって来た。新築と思われるしゃれた小屋、横には昔の石積みの小屋の崩れた部分に新しい石を積んで、これまたしゃれた前室がある。40 年前はまだランプしかない小屋もあったが、最近の山小屋事情はおおいに変わってきた。要予約で2食付きで13000 円ぐらいする。それぞれの小屋が特色を出し食事もなかなか美味そうという話である。オレは永らく小屋には泊まっていない。
- ◎小屋の横の広場で行動食を喰った。コマクサの群生地らしい。かつて全滅したそうだが地元の中学生のお世話でだんだん復活しているようだ、この広場にも所々に手のひらサイズの緑の上にコマクサが咲いていた。それより感動は、目の前をホシガラスがふらふらと横切った、黒い体に白い斑点、おおラッキーである。ホーホケキョもさかんに聞こえた。
- ◎10：10 長らく休憩して木曾駒ヶ岳方面に行き、すぐの分岐を右に折れ、岩ごつごつのところを登っていく。てっぺんにやって来た、風がきつい、空気は澄んでまわりがよく見える、感動である。さっきの分岐まで行けるのではと進んだ。岩場の道だが、樹がある、根がある、石がある、そんなこんなを掴んで難なく分岐まで帰ってきた。小屋で20分ほど休憩したので体力も回復、これからは下りなので疲れはふっとんだ。
- ◎11：40 だいぶ下ってきた、上では涼しく快適だったが、徐々に熱い、真夏の昼間の暑さである。
- ◎湿ったところで黒い蝶がたくさんいた、名前はわからない。水場でのどを潤した。
- ◎3:00 車のところに下りてきた。10 時間半の山行でした。歩き始めてすぐにソロの女の子が追い抜いていった。ほとんど下ったところで又その彼女、木曾駒まで行って来たそうだ。我々は将基頭山往復でフーフーである。
- ◎テント場まで帰り、持参のビールを湧水につけ、車で街に向かった。まず、みやげのブルーベリーを買い、風呂へ。「おお 来たことがある」次にスーパーで今宵の食材とビールの追加。テント場に帰ってまずは乾杯、フライパンで、肉、ズッキーニ・・・ご馳走をいただき寝た。
- ◎朝は高いガソリン（185 円/L）を入れ1 時ころ帰宅した。夜は河原で走った。